

小特集 江戸の災害クロニクル

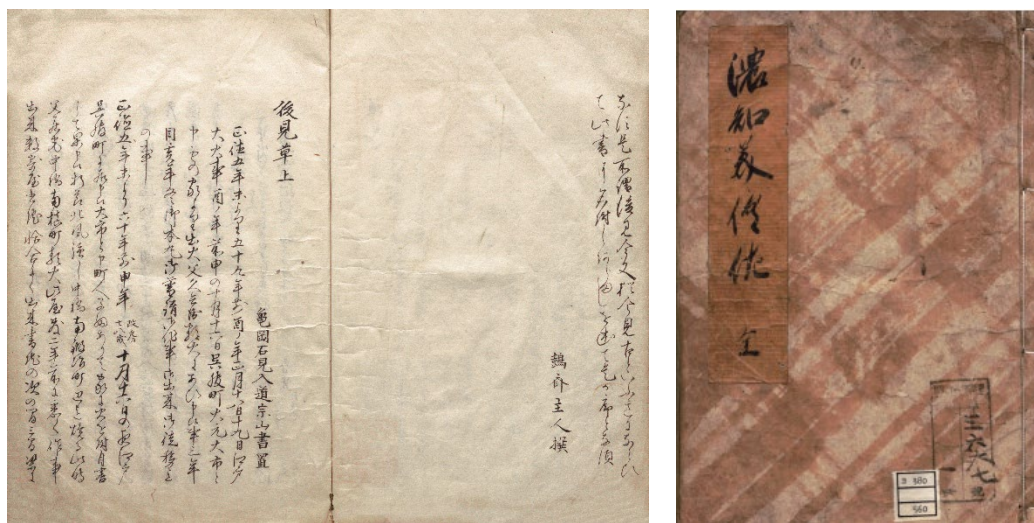
江戸時代後期は、日本の歴史上でも大規模な災害が集中した時代でした。大地震、津波、洪水、そして都市を襲った大火。当時の人々は、これらの凄まじい自然災害をどのように記録し、その経験を後世に伝えようとしたのでしょうか。

本特集で紹介する資料の多くは、家屋の倒壊数、死傷者の数、被災地の範囲といった客観的な事実を淡々と記しています。この冷静な記述の背後には、日常を一変させられた人々の深い驚きと混乱、そして生活を再建しようとする強い意志がにじみ出ているかのようです。

都市部では、災害は広範囲に被害を及ぼし、社会秩序に深刻な影響を与えました。地震後の火災、河川の氾濫といった複合的な被害に対し、幕府は金銭や資材の支給、物価の統制といった制度的措置を講じています。これらの記録は、災害と復興がいかに当時の行政と密接に結びついてきたかを示しています。

これらの資料群は、被害の規模や復興に向けた動きだけでなく、日々の生活の再建、そして人々の感情までもが読み取れる、災害を経験した人々の「声」そのものです。

江戸時代の資料から、現代の私たちが未来へ受け継ぐべき「災害の記憶」と「生きる知恵」を、ご覧ください。



1. 『後見草』 3巻1冊

亀岡宗山書置；鶴齋撰；麻生然才写 文政10(1827)年写

蘭学者・医師である杉田玄白(鶴齋)(1733-1817)の著。天明7(1787)年成稿、全3巻。上巻は亀岡宗山が正徳5(1715)年頃に著した明暦3年正月18日(1657年3月2日)江戸大火(明暦大火)に関する書物の再録。中・下巻は宝暦10(1760)-天明7(1787)年に起きた騒動や事件を記述し、災害に関わっては天明3(1783)年浅間山噴火及び同3-4(1784)年天明の大飢饉の記述が知られる。展示箇所は本書上巻の冒頭部分で、前段に明暦2年10月16日(1656年12月1日)夜の江戸呉服町における放火事件を記す。(白井)

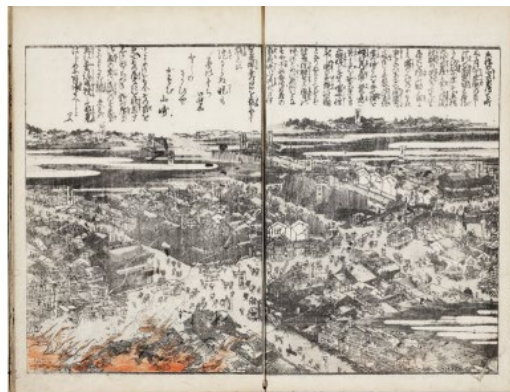


諸國の地震海嘯の事。前々程とあり
又分りし地不崩し人の話し聞けり。聞度
毎々記し置けり。此書録。後撰。今も
小舟をたし。吉州の再世。此書録。又
時化にさし。風吹。はひつ。正説の事
記し置けり。此水者。なり。此
氏の風神の集り。此書
慶徳の主人



2. 『地震海嘯正説録』 2巻2冊

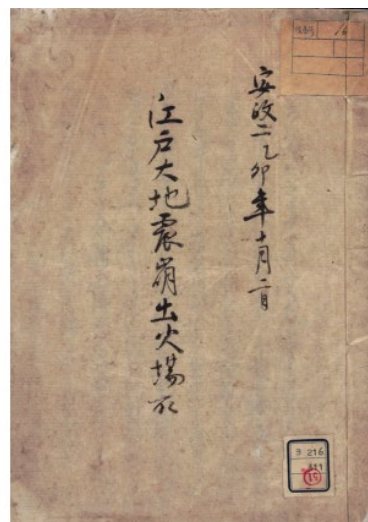
地震による被害や津波の実態を文字と絵で伝える。著者は小島涛山とされ、彼の記録を抜粋・編集した形で構成されている。嘉永7(1854)年に日本列島で頻発していた地震に関する記録などがまとめられ、家屋の倒壊や津波による浸水や流出、人びとの避難の様子などが生々しく記されている。また、井戸水の濁りなど、地震の前兆とみなされた現象にも言及がある。(水野)



3. 『安政見聞誌』 3巻3冊

歌川国芳ほか画

安政2(1855年)10月2日、江戸をマグニチュード7前後の直下型地震が襲った。本書は、幕末の戯作者である仮名垣魯文(1829-1894)がこの安政江戸地震と大火の被害を記録したものである。挿絵は歌川国芳らが手がけ、被災直後と復興後の風景を対比的に描く工夫が見られる。被害の描写にとどまらず、前兆や避難、迷信、風評など、災害時の空気感が生々しく伝わってくる。災害の記録を通して、人びとの知恵や感情、社会の姿勢が浮かび上がる。(水野)



4. 『安政二乙卯年十月二日江戸大地震崩出火場所』 1冊

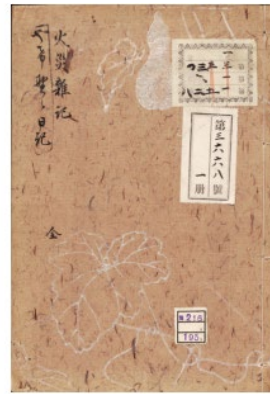
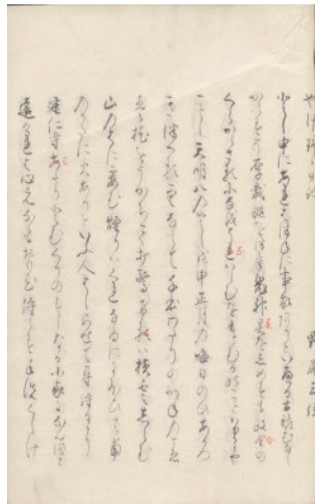
安政江戸地震における江戸市中の被害状況をまとめた記録である。市街の広範囲で家屋が倒壊し、32 か所から出火、被災町は3,000を超えた。幕府は震災後の対応として、旗本や御家人に金銭を支給し、物価の急騰を抑える措置も講じている。被害の規模とともに、災害時における統治の実態や社会の混乱ぶりを伝える。(水野)



5. 『大地震暦年考』 1冊

北峯閑人編 安政3(1856)年刊

安政江戸地震直後の安政3年1月に出版された地震に関する普及書。序文に「北峰閑人」とあるので随筆家の山崎美成(1796-1856)の編著か。内容は「大地震の弁説」「地震西洋の弁」「地震前知の弁」「元禄大地震古図」「意太利亞国地震の図」「震雷よけ殿造の細図」「農家雷風よけの図」「津浪あげ引の図」「文政十一年越後国大地震書翰の写し」「天武天皇七代より安政二年迄地震雷水津浪の事」で構成。海外の地震の記事や古代から安政2(1855)年に至る日本地震年表を掲載している。(白井)



6. 『火災雑記』 1冊

大きく次の3部で構成される。(1)明暦2(1656)年江戸呉服町火災から寛文10(1670)年大坂風雨災害に至る、江戸・京都・大坂など全国各地で起きた災害の年代記。(2) 明和9年2月29日(1772年4月1日)目黒行人坂大火に関する2種類の記録。(3)京と御所の火災記録と思われる野尻三位「天明火災記(やけ野の日記)」。展示箇所は(3)の冒頭部分で野尻三位は不明である。本書は18世紀末の成立と思われ、当時各地で頻発した災害の経験から過去の災害に対する関心と知識への欲求が社会的に生まれたとも想像できる。(白井)



7. 『古今洪水記』 1冊

享保13年9月2日(1728年10月4日)の大雨による江戸洪水、寛保2年8月1日(1742年8月30日)頃の台風による関東洪水、天明6年7月18日(1786年8月11日)以降の大雨による関東洪水についての触書や報告文書の集成。特に享保13年と天明6年の内容が多い。展示箇所は本書冒頭の寛保2年洪水に関する記事の書き出し部分で、荒川上流の堤防決壊と被害につき幕府勘定所役人が提出した文書の写。また天明6年の記事では大雨と河川の増水による江戸各所の橋の流失や橋杭の損傷、また浅草・本所・深川の洪水被害などが見られる。(白井)

筑波大学附属図書館常設展 小特集「江戸の災害クロニクル」

解説 白井哲哉(図書館情報メディア系教授) 水野裕史(芸術系准教授)

令和7(2025)年12月1日 編集・発行 筑波大学附属図書館特別展 WG
